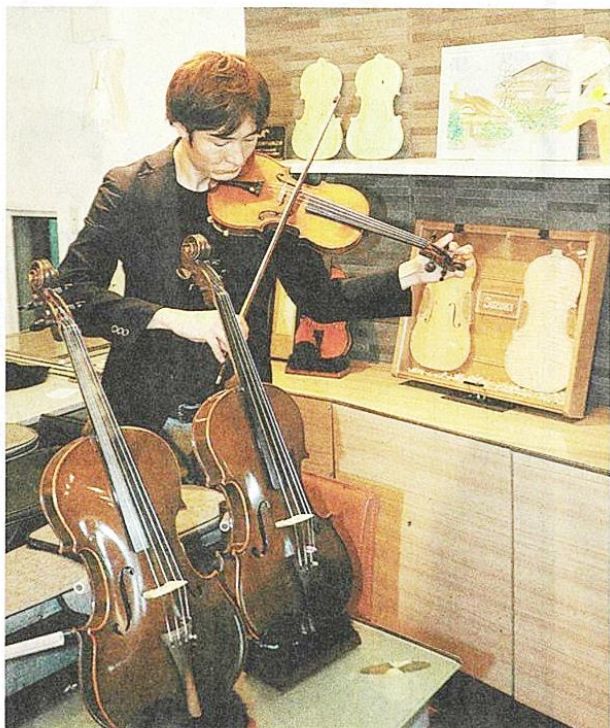


宮沢賢治の楽器“里帰り”

「鈴木バイオリン」製 100年の時超え

童話作家の宮沢賢治（1896～1933年）が購入した「鈴木バイオリン製造」のバイオリンとビオラが、大府市桃山町の本社工房に「里帰り」している。修繕の上、市歴史民俗資料館が来年初頭に予定する企画展で公開される見込み。小野田祐真社長は「約100年前の製品だが、技術は現在に劣ることなく精密に作られている。豊かで温かな音色」と目を澄ます。（望月海希）

企画展「宮沢賢治と音楽」を当て、音楽愛好家だった文は、鈴木バイオリン製造を通 豪の横顔を紹介する内容。展 じた大府市と賢治の縁に光 示資料として、バイオリン1



バイオリンの音色を確かめる小野田社長。手前はビオラ―大府市桃山町の鈴木バイオリン製造で

来月から大府の資料館で公開



宮沢賢治＝林風舎提供

丁とビオラ2丁を岩手県に住む賢治の親族から借り受けた。

小野田社長によると、バイオリンは1923～33年に作られた高級価格帯の製品で、ビオラは07～33年製の初心者向けのグレード。いずれも鈴木バイオリン製造が名古屋市内に工場を構えていた時代に作られ、問屋を介して賢治が岩手県内の楽器店から購入したとみられるという。

童話作家であり、農業技術者でもあった賢治。農民の生活向上のため立ち上げた私塾「羅須地人協会」では、レコード鑑賞や楽器演奏を楽しんでいた。

「セロ弾きのゴーシュ」を記した賢治は、自身も鈴木バイオリン製造のチェロ（セロ）を所有。バイオリン2丁とビオラ、チェロで編成する弦楽四重奏を実現しようと、これらの楽器を購入したと推察されるという。保存状態は比較的良く、展示を前にクリーニングを施し、ネックの反りなどを修正する。

鈴木バイオリン製造は2021年、本社を名古屋市から大府市に移転。かつて大府分工場があった縁もあり、大府市は小学校でバイオリンの授業を取り入れるなど、音楽を生かしたまちづくりを進めている。

小野田社長は「バイオリンのまち大府にあるわれわれの会社に、宮沢賢治さんの楽器が帰ってきたことに縁を感じる。展示を通して歴史的価値を伝えたい」と話す。

企画展は来年1月25日～5月18日。宮沢賢治記念館（岩手県花巻市）にある賢治のチェロの高精細画像や直筆の書簡、故高畑勲監督のアニメ「セロ弾きのゴーシュ」の原画などを展示する。